静岡のNPOの現場を、２年生の３人が体験！

▸▸▸▸ NPO法人POPOLOで活動した学生が、発見や学びを語りました

NPOとの出会いと、そこで体験したこと

NPO法人POPOLOさんで、どんな活動をしているのですか？

西脇　NPO等からPOPOLOに、助成金を受けるための申請書が提出されてくるので、それをチェックして、メールや電話を通して申請者とやりとりし、一つひとつ仕上げていく作業。そのあとは、助成金を使った領収書が提出されるので、書類の記載内容と違いがないか、経費として認められるのかなどのチェックもした。

――これまでそういう作業をやったことは？

一同　はじめての経験だった。

――そもそも、POPOLOさんとの出会いは、何でしたか？

西脇　静岡大学内で丹沢先生が主催している「ふらっとフォーム007」という学生の活動拠点があり、そこで丹沢先生から紹介があった。3人とも。ぼくはバイトもやったことがなく、やったことがないからこそチャレンジしてみようと思った。

海野　一年前の春休みのころで、時間があった。丹沢先生から「やってみない？」と後押ししてもらったから、気軽に始められた。

福光　募集だけだと素通りしちゃうが、自分のことを見て先生が勧めてくれているのが分かったのでチャレンジした。

西脇　新しいことが苦手。信頼できる、ふだんから付き合いある先生から紹介されることで、安心して参加できた。困っても相談できると思った。

学びんだこと、苦労した経験

――どんな学びがありましたか？

海野　基本はそれぞれがパソコンで作業。分からないことも出てくる。質問しにくいのだが、聞かなかったら後から困る。聞けば丁寧に答えてくれるし指示を出してくれるので、勇気を出して一言聞くことの大事さ、一人で抱え込まないことの大事さを思った。

西脇　POPOLOの事務局長の鈴木さんから、「分からないことがあればみんなが見える場所（グループLINE等）で聞いて」と言われた。他の人と共有することで、みんなの解決につながる。

福光　細かい経理のような作業への苦手意識があり、不安が大きかった。海野くんと西脇くんがすでにやっていたから、見よう見まねで始めることができた。途中で、鈴木さんが「細かい作業に向いているね」と言ってくれたので、自信を持つことができた。

インタビューに応じてくれた、海野さん（人文社会科学部２年生、右上）、福光さん（グローバル共創科学部２年生、左上）、西脇さん（人文社会科学部２年生、左下）

海野　自分は言われたことないけど（笑）

福光　ぼくは海野さんがやっていることを見て、学びながら取り組んだ。

――そうやって、一生懸命学んで頑張ろうとしている姿勢がよかったのかも。では、活動で苦労したことはありますか？

海野　申請するNPOが、どうやら申請書の記入などに苦手意識がある人が多そうだった。説明してもすぐには伝わらないので困っていると、鈴木さんから「全部すぐに伝わるはずはない、根気よく丁寧に、でも長すぎずに説明してはどうか」とアドバイスがあった。

西脇　メールでのやりとりなので、うまくコミュニケーションできない。鈴木さんには「自分が分かりやすい文章でも、相手にとって分かりやすいとは限らない」と言われて、そこから相手に合わせて表現を変えるなど工夫した。

福光　大前提だとこちらは思っていて、説明を省いていることも、ちゃんと文章にして説明する方がいい、というアドバイスをもらった。

西脇　言わなくてもきっと伝わるだろう、と思うのをやめた。

海野　説明が長くなるので、見出しに番号をつけて、抜けがないようにした。向こうも返信もしやすくなると思う。

――他に、現場で働いてみて、ドキドキしたことなどありましたか？

福光　自分は作業スピードがゆっくり。海野さんがすごく早いのをグループLINEなどで見るたびに、めちゃくちゃ焦った。

西脇　扱う金額が大きいので、書き間違いなどでミスが起こると怖い。丁寧さと速さとで焦りはあった。申請書の申し込み期限があるので。
福光　やれるだけやってみて、だんだん効率化はできたと思う。
海野　実は自分も焦りながらやっていた。
一同　そうだったの？！（笑）
海野　団体との関係もあって、返事をするのが遅くなるのが良くないと思い頑張った。

今後に活かしていきたいこと

――学んだことをどんなふうに活かしていきたいですか？

海野　自分の説明したいことを説明するのではなく、「相手に分かってもらえるように」説明しようとするようになった。大学生活でもバイトでも活かしていきたい。
西脇　「大学生のうちに体験できたのはアドバンテージだよ」と鈴木さんに言われた。大人になってから躓きを経験するより、見守られている安心感の中で失敗しながら学べているのがいい経験になった。ちょっとしたミスがあったときに、いかに素早く対応するかが大事と学んだ。
福光　お金を扱うので、「抜けがないこと」の大事さを体感した。
海野　文章をしっかり理解して、こまごまとしたことも抜けなく対応できる大人になっていきたい。

発見したこと

――意外だったことや、発見はありましたか？

西脇　以前は、大人は学生とは全然違うというイメージがあった。大人は完璧で、学生なんてついていけない、というような。でも、同じような人間だというのが分かった。できることにはもちろん差があるが、教えてもらうことで、学生もついていける。
福光　大人だからって急に完璧になるわけではないのだなと。自分たちとそこまで大きく変わらない。人によっては抜けているところもあるみたいで、大人という存在に親しみが持てた。

2023年度（昨年度）に取り組んだ、POPOLOでの活動の様子。フードバンクの食料の仕分けをしています。

西脇さん、海野さんは、チャレンジ2030全体を運営するチームメンバーでもあります。

自分に起こった変化

――NPOの現場を体験してみて見方が変わったことや、みなさん自身の変化はありますか？

西脇　NPOは誰かを助けるための組織なので、余裕がある人がやるものだというイメージがあった。実際には、それぞれの組織や人が必死に取り組んでいるのが良く分かった。
海野　他のNPOの人たちと向き合ってみて、事務作業が得意ではないらしいと感じることが多かった。「NPOが支援するNPO」のような存在がもっと必要、と思った。大学生ができることがもっとあるかもしれない。
西脇　これまでは、チャレンジすることへのハードルがすごく高かった。でも、最初から完璧な人はいない、やりながら成長していけばいい、ということに気づき、新しいことにチャレンジするハードルが低くなったのが大きな収穫。

NPO法人POPOLO

生活困窮者に住居を一時的に提供し、就労、自立支援を行う富士POPOLOハウス事業と、まだ安全に食べられるのに処分されてしまう食料を生活困窮者に提供するフードバンク事業を行っています。
チャレンジ2030プロジェクト全体の企画・運営をするマネジメントチームの一員でもあります。

ふらっとフォーム007

静岡大学の大谷キャンパスにある、学生の活動拠点です。丹沢教授（未来社会デザイン機構副機構長）が、定期的に学生の活動の相談に乗り、地域の団体や企業とつなぐ役割を担っています。「まだどんな活動がしたいのかうまく言葉にできない」という学生でも、気軽に参加し、仲間をつくることができる場です。